
FAIRYTAIL ~過去の記憶は未来の希望へ~

マクレーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y T A I L ~過去の記憶は未来の希望へ~

【NNコード】

N4769Z

【作者名】 マクレーン

【あらすじ】

大事な仲間を殺された

復讐の為に生きようと決めた少年は、新たな仲間に出会った。

フェアリー テイルで少年は変わる

基本的には主人公サイドで原作に沿って進めます。オリ話もあります。

オリキャラ紹介 part 1 (前書き)

更新しました

オリジナルキャラ紹介 part 1

名前：スピアード・フルミネ

愛稱：スピア

性別：男 年齢：現在20歳 FT加入時14歳

好きなもの：仲間
睡眠
アオイ

嫌いなもの：闇ギルド 不眠

魔 法	魔 法
追 憶	追 憶
劍 閃	劍 閃
縱 橫	縱 橫
雷 神 劍	雷 神 劍
車 軸	車 軸
劍 先	劍 先

雷系魔法

レイシングボルト テクサスの技 直接テクサスから教わった。

西手に紫電を貯め刀にまとわせ 柄と切先を両手
で持ち投げる。

紫電拳をあわせた拳で、相手を連打で殴りつける。

容姿

金髪のツンツンした髪

ハーフセリフ：どうも面白過ぎるよな男の上

首には十字架のネックレス

紋章は首の左側

名前：アオイ・アクナス

年齢：享年14歳

性別：女

好きなもの：甘いもの スピアード

嫌いなもの：虫

魔法：剣技 水系各種魔法

容姿

茶髪のボブ

ヘソだしTシャツ

デニムのショートパンツ

剣の使い手。6年前、闇ギルド黒い天使達に殺害された。
ソウルエンジェルズ
魂転生の効果で意識だけが、刀に残った。

禁忌魔法

名前：ガンマ・ゲレム

年齢：現在20歳

性別：男

好きなもの：金

嫌いなもの：酒 タバコ

魔法

ガスマジック

パライズフリット

フレイターフリット

サンダーフリット

アクアフリット

水流弾

雷弾

貫通弾

敵を痺れさせる魔法の弾丸

火属性の弾丸

水属性の弾丸

雷属性の弾丸

硬い装甲も貫通させる弾丸

容姿

白髪で長身

ファー付きの白いコート

紋章は背中 蛇姫の鱗

黒いズボン

オリキャラ紹介 part 1 (後書き)

はじめまして！
人生初小説です。
いたらないところもあると思うので、ご指導の程よろしくお願いします。

フェアリー・テイル加入

マグノリア

一つの建物の前に一人の少年が立っていた。

「ここが…フェアリー・テイルか」

背負っている刀は少年の体より長く、刃先は地面についている。

刀の柄を握り目を閉じる。

「入らないの？」

声が聞こえるが周りには誰も居ない。気のせいではない。

そう、刀が喋っているのだ。

「ん？ああ、お前の事どう説明するかを考えてたんだ」

そう言いつつ、ギルドの扉を開けた。

扉を開けると、騒音とともに熱気が顔を襲った。

少し歩くと、数人が少年に気づき静まった。

「見ない顔だな……誰だ？」

その声が聞こえたが、気にせぬ歩く。

カウンターの所に座っている老人に、他と違う何かを感じた。

「すみません、フニアリーテイルところギルドはここですか？」

「アハ。お前さんは誰じゃ？」

「スピアード・フルミネです。スピアと呼んでください」

「では、スピア。お前さんはなぜここに？」

「あの、このギルドに入りたいのですが……」

「ああ、構わんよ。来る者拒まずじゃ」

「ありがとうございます」

「ワシは」のギルドのマスター・マカロフじや。まあ、『風魔』にやつていけい

「解りました。よろしくお願ひします」

と、握手を交わす。

「ところでスピア。お前さんはどんな魔法を使ひのじや？」

「剣技なら誰にも負けません」

「ふむ、大した自信じや。どれ」「オレと勝負しないーーー……」

マカロフの話の途中に駆けてきた少年がいた。

桜色の髪にツリ目。鱗のようなマフラーをしている。

「君は？」

「オレは、ナッシだ。よろしくなー。」

と、少年は笑った。

「あ…スピアード・フルミネです。スピアと呼んで下さー。」

「よしースピア、オレと勝負しろー。」

いやいやいや……起きなりかよー。

「おにナツ。そういうのは後にしる」

スピアの後方から、声がした。

見ると鎧を着た、赤い髪の少女がいた。

「スピアと云つたな。私はエルザだ。よろしく頼む」

随分としつかりした人だな

「うわいよろしくお願ひします」

エルザと挨拶をすると、他のメンバーも集まってきた。

「オレはグレイ・フルバスターだ。よろしくな

「よろしくお願いします。つて……何でパンツ一丁なんですか？」

「まつ…しまつた！」

「アアアアア」

パンツ一丁のグレイを見てナツが笑っている。

「なんだよーツリ田ー。」

「あー…やんのかタレ田変態ー。」

うわ。ケンカかよ

「あの、ケンカ…」「やめんかあー」…ふじつー。」

バキッ！

ボコッ…

ナツヒグレイのケンカを止めようと、ヒルザが割り込んだが

近くにいたスピアまで巻き込まれた。

「まつたくーお前らは礼儀をわきまえたひだりー……ん、ひだりたスピア？」

「い……痛てええ

「い……いや、大丈夫です……」

「そりゃ。ならいいんだが」

何だこのギルドは……

「新入りだつてえ？」

白い髪にポニー・テール、へそ出し少女が現れた。

「相手してあげるよ。かかつてきな

うわ、不良だ

「よせ!! ハ。お前じや勝てない

「アア？ やんのかヒルザアア！！」

「上等だー!! ハ、かかつてこいー！」

いやいやいや。あんたらもケンカかよー！

バキッ！

ボコッ！！

「つて……誰も止めないんですか？！」

慌ててマカロフに聞いてみたが、

「反発するのは認め合つか？」奴等には互いの顔がハッキリと映つてゐる。なーんも心配する」とないわい

ダメだ。
仕方がない

卷之三

大きく息を吸う。

卷之三

スピアの大声とともにギルド内が静まる。

静寂のたま

新入りのくせに偉そうにしてんじゃねえええ！！

ミ》が近くにあつたガラスの《ツ》を投げつけた。

しかし、それはスピアの目の前で粉々に砕けた。

何？

ギルド中が騒然とする。

「い、今、何が起きたんだ？」

エルザが驚き、誰ともなく言つ。

「無数の剣戟を一瞬にして……見事」

とマカロフが叫ぶ。

刀を背中に戻し、一息つく。

「…………ふう」

周囲の視線がスピアに集まっている。

あつーまたやつちまつた……

「　　スゲヒヒヒヒー……」「　　

えつ？

「スピア、スゲエな！オレにも教えてくれよー。」

「馬鹿か、お前にできるわけねえだろナツー。」

「やつてみなきや、わかんねえだろー。」

バキッ！

ボコッ……

「……本当に騒がしいギルドですね」

「ああ。だが、ここになると心が安らぐ。そつだろ？」

エルザに問われ、スピアは迷うことなく答えた。

「はい！俺、このギルドに来て良かったです」

「…………よつこーそー！妖精の尻尾へー！」

フェアリーテイル加入（後書き）

いやあ、難しいですね。

ルーシィ加入まで過去話です。

蛇姫の鱗と闇ギルド

闇ギルド白い虎ホワイトタイガ

「な……何なんだコイツ」

震えた両手で銃を持ち、銃口を田の前の人物に向けていた。

金色のシンシンした髪

ルーナセラフイといふ田色のパートのような服の上下

そのパートの下には黒のシャツ

首には十字架のネックレス

そして妖精の尻尾のマーク

「どうする？大人しく軍隊に捕まるか、俺に倒されるか好きな未来を選べ」

「ひつ……つわあああああああ！…」

持っていた銃の引き金を引いた。

同時に弾丸と金属がぶつかる音がした。

弾丸は建物の壁に突き刺さった。

目の前の人物は刀を抜いていた。

「や……やめてくれ……「雑魚は修行に励め」……えつ？」

ドスツ

銃を持つている男の腹を殴り気絶させる。

マグノリア

「ん？スピアじゃねえか」

後ろから声がした。

「ああ、ナツ。仕事終わりか？」

俺がフェアリー・テイルに入つてから、半年がたつた。

相変わらず、うるさいギルドだが楽しくやっている。

「あい。ナツ、また街を壊したんだよ」

ハッピー。3ヶ月前にナツが拾ってきた卵から生まれた青い猫だ。

「やあ、ハッピー」

「スピアは何の仕事に行つてたの？」

「……闇ギルド潰しだ」

「スピアはホント闇、ギルド潰しが好きだよね」

「好きではないけどな」

そんなこんなでギルドについた。

「おお、スピア。仕事はどうじゅつた」

ギルドに入るなりマスターであるマカロフが訊ねてきた。

「まあ可もなく不可もなくです」

「そうか」

マカロフは酒を飲む。

「グビッグビップハー」

「じつちやん！オレには何も聞かないのかよーー！」

ナツが口から小さな火をはきながら囁つ。

「ん？ナツぅ！また仕事先で街を壊しあつてー！」

マカロフとナツの会話を聞きながら、リクエストボードに近づく。

リクエストボードには沢山の依頼書が貼ってある。

『邪竜退治』

『深海の宝探し』

三枚の依頼書をとり、マカロフの元へ向かう。

途中ナツとすれ違った。

「仕方ねえ、仕事行くかハッピー」

「あいー。」

「マスター。この三つ頼んで、3日で終わらせます

「何じゃ？ もう仕事に行くのか」

「さつきの仕事で遠方まで行つたので、金欠なんです」

「そうか。しかし、お主に頼みたい仕事があるんじや」

マカロフは酒入りコップをカウンターに置き去つた。

「闇ギルド夜の王ナイトキングを知つてあるか？」

その名を聞いたとき顔つきが変わつたことに、自分でも気づいた。

「バラム同盟黒い天使達の傘下の一つですねブラックエンジェルズ」

先日、俺が潰した白い虎ホワイトタイガーも傘下の一つだ。

「せうじや。そのギルドを蛇姫の鱗と妖精の尻尾で倒す」とこなつた

「

「夜の王程度のギルドなら俺一人で大丈夫ですよ」

見栄ではない。実際、ホワイトタイガ白い虎より規模が小さい。

「詳しいことは判らんが、禁忌魔法を使い何かを企んでおるようなのじや」

禁忌魔法。歴史から抹消された、禁忌の魔法。

その言葉を聞いた途端、俺の体の震えは止まらなかつた。

「…解りました。俺が行きます！」

「出発は一日後。ハルジオン集合じや」

マカロフがそう言い、カウンターにある酒入りコップをとり一杯飲む。

蛇姫の鱗と闇ギルド（後書き）

突如思いついた話ですが、ちゃんと考えてあります。
次回、スピアの過去について少し触れます。

禁忌魔法

ハルジオン

「潮風がいいなあ～」

港町のハルジオンは海から陸に向かい風が吹いている。

「ふわあ～。眠い」

大きなあぐびをした後、ポケットから紙切れを取り出す。

蛇姫の鱗リミアスケイルからの選抜者の特徴が書いてある紙だ。

「マスター、もっとわかりやすい特徴を書けよな。白髪の男だけじや解るわけないじゃん」

紙切れから目を離し、周りを見渡す。

「あれかな？」

後方にいた、白髪の男に話しかける。

「あの～リミアの方ですか？」

その男はスピアのに顔を向ける。

「ん？ああ」

その男も紙切れを見ながら言った。

その紙切れには、スピアの特徴がしっかりと書いてあった。

「妖精の尻尾のスピアードです。よろしくお願ひします」

軽く頭を下げる。

「蛇姫の鱗のガンマだ」

ガンマは言った。

「ガンマさん、今回の依頼について何か聞いていますか？」

「依頼主は地方ギルド連盟。報酬額は八万」。依頼内容は闇ギルド
ナイトキング
夜の王の行おうとしている事の解明と阻止

ガンマは淡々と語った。

「他に何か知りませんか？」

「……他に？」

怪訝そうな顔をしている。

「禁忌魔法についてです」

「いや、何も知らない」

ガンマはそう言い歩き始めた。

「あやあああー。」

突然、女性の叫び声が聞こえ振り向いた。

「誰か、カバンを取り返してええーー。」

ひつたくりか。

スピア達と同じ方向に走ってきたので止めようとするが、ガンマに止められた。

「よせ。ここでひつたくりを捕まえたら、軍隊に引き渡さないといけない。時間がかかる」

「田の前で犯罪を見て、ほっとけって言つんですかー。」

「俺はこの後も仕事があるんだ。時間をとらせるな」

「仕事はキャンセルすればいいじゃないですかー。」

すると、ガンマはスピアの胸ぐらをつかんだ。

「あのな、俺たちは魔導士だぞ。金にならない仕事をしてびつかぬんだ」

「金になるならないが大事じゃないだろー。」

「話にならない。勝手にしろ、俺は先に行く」

「勝手にしますよ」

しばらく睨みあつた後、ガンマはスピアの胸ぐらを離し歩いて行った。

「何なんだよ、アイツ」

スピアはそう言いながら、じかにに向かって走っていくひつたくり犯の腕をとり、投げ飛ばした。

「うお？！」

「金、金つるさいんだよー！」

ひつたくり犯を蹴る。

「なつ…なんだよー！」

「うお？」

「う」苦労様です

軍隊に犯人を引渡す。

「すいません。魔導士さんに『迷惑をおかけして』

おそらく新人であろう軍人が言つ。

「いえ。魔導士も軍人も関係ないですよ」

「何かあれば言つて下さい。ご協力します」

その軍人が敬礼をしながら言つ。

「じゃあ、一つお願ひしていいですか？」

「どうぞ」

敬礼をやめる。

「闇ギルド^{ナイトキング}夜の王についてです」

「解りました。」^{シリカヘビウゼ}

軍人が歩き出す。

「あ、あの。あなたの名前は？」

「ミハエルです。あなたは？」

「フェアリーテイルのスピアードです」

ミハエルから聞いた情報を頼りに、ハルジオンの北西にある夜の王^{ナイトキング}に向かつた。

ギルドの周りは岩場で、周囲には何もない。

ギルドの真正面にある大きな岩陰に、ガンマが居た。

「ガンマさん。何か変わった様子は？」

後ろから話しかけられたガンマは、スピアだと気づくと一瞬戸惑いながらも答えた。

「……特に何もない」

ガンマの横にしゃがみ、岩陰からギルドの様子を見る。

しばらくすると、ギルドの中から人が大勢出てきた。

「あれは？」

スピアは横にいる、ガンマに聞いた。

「夜の王^{ナイトキング}の連中だろうな……真ん中の上半身裸の奴がいるだろ」

ガンマが指を指す。

「はい」

「あいつは、ファイ。夜の王^{ナイトキング}の実質的なリーダーだ。奴は元々巨人^{ノーズ}の鼻つてギルドに所属していたんだが、金の亡者でな。依頼料が高い、暗殺依頼……本来はそんな依頼が有ること自体遺憾なことなんだが……ばかりを選び、外道落ちした。」

外道落ち。闇ギルド入りすることだ。

スピアはガンマを見つめる。

「…何だ？」

「いや、よく調べてるなあ～と思つて」

「…金のためだ」

二人がそんな会話をしていると、ファイ達に動きがあつた。

魔導四輪に乗つてゐる。

「ん？ 奴等、どこに行くんだ」

「追いかけましょう」

「ああ」

ファイ達が魔導四輪でハルジオンに向かつたのは、方角で判つたが

スピアとガンマは走りだ。追いつけない。

二人がハルジオンに戻つてきた頃、街は既に夜の王ナイトキングに占拠されていた。

軍や評議院がいたが、皆倒されている。

「見つけたぞ、ファイ！」

ファイは、一階建ての家屋の屋根に立っていた。

「あ？ 誰だ、てめえ」

「俺はフェアリー・テイルのスピアードだ！」

「スピアードだ？……聞かねえ名だなあ。子供は家に帰んなガキウチ」

スピアとファイが睨んでいる間に、ガンマが入ってきた。

「オイ、正面から攻めんじゃねえよ」

スピアの後ろに、ガンマが並んだ。

ファイは、スピアの後ろに居る人物を見た。

「ん？ お前はガンマじゃねえか」

「……」

「どうした？ 俺らの仲間にでもなりに来たか」

「ガンマさん、知り合いなんですか？」

ガンマに聞く。

「知り合いつて程のもんじゃねえよ。『イツはよ、金の亡者として裏社会ではちょっとした有名人なんだぜ』

答えたのはファイだった。

「何度も誘つてやつてんのによ、コイツ『外道にはなりたくない』だとよ。ふざけてるぜ」

ファイが両手を広げ、呆れ顔をしている。

「……ふざけてなんかない」

「あ？」

「ガソーマさんは、ふざけてなんかない！」

大きな声で怒鳴ったのはスピアだった。

「確かに、ガソーマさんは金の亡者なかもしれない。だけど、魔導士として大事なことを知つていた！！」

「大事なことだあ？」

「魔導士の……魔法の力を人殺しなんかに使つちゃいけないって事だ！……」

「知らねえよ、そんな事。……オイ、そいつら殺つちまえ」

ファイは、そつ命令すると屋根の向こうに消えていった。

「あ、待て！」

スピアが叫ぶが、声は届かなかつた。

「ファイさんの邪魔はさせねえ」

命令をされた、闇ギルド団員が言つた。

「殺つちまえーー！」

「つおおおおおーー！」

そつ叫びながら、五十人ほどの団員が攻めてきた。

「……ガンマさん。追つてくださいーー！」

「何？」

「アーッはガンマさんが倒してく下さい。この数は、ガンマさん一人じゃ無理です」

「無理つて…お前こそこそ一人じゃ無理だろ」

「いいから、行つて下さーーー！」

「……分かった。ここは任せたぞ」

そつ叫びつとガンマは走つて行つた。

「おじおい。子供一人で大丈夫なのか？」
ガキ

闇ギルド団員が挑発していく。

「さて。ガンマさんも居なくなつたし…」

そう言いながら刀を抜いた。

「闇ギルド潰し、始めるか

「OK！やつちやつて！！」

刀が喋る。

「行くぜ、アオイ！」

刀の鎬から切先を左手で、なぞる。

「追憶・剣閃！！」

右から左へ、光のような速さで相手を斬る。

「うわあああ！」

これで十人は減ったな

「囮め！..！」

スピアの周りを残りの奴等が囮む。

前後左右から、一人ずつ襲ってくる。

全員、剣を持っている。

スピアはまず、前方の敵を斬る。

次に、右の敵の顎に右足で蹴りを食らわせ

刀を持つ手を背中にまわし、刀で後方からの攻撃を防ぎ

右足の踵で、顔を蹴り

左の敵を斬る。

その間、三秒。

「何だ、コイツ。強ええ」

闇ギルド団員を倒した後、ガンマを追つてハルジオンの街を出た。

街を出てすぐの所に一人は居た。

「ガンマさん！」

そこでは、ガンマが倒れていた。

「……す、すまねえ。コイツには俺の魔法が効かねえ

ボロボロになつた体で、ガンマが言つ。

「口ほどにもなかつたぜ。ソイツ

ファイはスピアに向かつて言つ。

「最後に一度だけ、仲間に誘つてやつたんだがな。そいつ、もう金はいらねえだとよ」

「……？」

「『俺にはもう金は必要ない。今なら金より大事な物が分かる気がするんだ……それは多分、俺という人間を理解してくれる仲間だ！』だつてよ」

スピアはガンマを見る。

「ガンマさん……」

「つたぐ、ふざけてるよな。笑えるぜ」

そう言つた後、ファイが高笑いをする。

「笑えねえよ！」

スピアは、ファイに向かい切りかかる。

「フツ。ロックメイク……」

ファイが右手をかざす。

「シールド
盾！」

ファイの手の前に盾の壁が現れて、スピアの剣戟を防いだ。

「ロックメイク…ハンマー！」

スピアの頭上にハンマーの形をした岩が現れた。

「消えろおおお…！」

スピアは刀を上に掲げた。

「！」の大きさ、大丈夫か？」「

「樂勝、樂勝」

「追憶・十六夜！！」

ズドーン！！

衝撃が走る。

「フハハハ！」

「スピアード！！」

ファイ、ガンマが叫ぶ。

すると、ハンマーの形をした岩が液体のように溶けて消えた。

「な…何？！」

さすがのファイも驚いている。

「……十六夜つて技はな、剣先から無数の分解組織を放出して個体を分解する技なんだ」

「何だと！？」

「さあ、行くぜ！」

ハアアアアアと叫びながら、ファイに斬りかかる。

「クソツ！ ロックメイク…盾！」シールド

「無意味だよ。十六夜！」

ファイの前に現れた岩の盾も、十六夜によつて分解される。

「フェアリー・テイルには氷の造形魔導士がいる。俺より年下だが、お前よりしつかりした魔法を使つぜ」

その言葉はファイには届いていない。

「追憶・剣閃！」

スピアの渾身の一撃がファイに当たる。

「ガハツッ」

ファイはそのまま崩れ落ちた。

「…ファイを倒した？」

ガンマが体を引きずりながら、近づいてきた。

「……大丈夫か？…スピアード」

「ガンマさん、怪我してんだから動かないでくださいよ」

よろけるガンマに肩を貸し、歩く。

「街に軍隊が常駐しているはずだから、コイツを捕まえてもらわないとな」

「そうですね」

「……ね……待てよ……」

後ろから声がした。

振り返るとそこにはボロボロになりながらも立ち上がる、ファイがいた。

「て……てめえらを……るすまでは……」

虚ろな目をしている。

「死なねえええええええ……」

突然叫んだ、ファイに危険を感じた。

スピアは刀を抜いた。

ガンマも、痛みが引いたのか武器である「丁拳銃を取り出す。

「おもしろい……もの……を見せてやる……」

セイツーながら、ファイは傷口の血を指に塗り

体に文字を書いた。

「ローブ文字？」

ガンマが言つ。

文字を書き終わると、両手を合せ呪文を唱えた。

「アメラ・カジヌ・サドル ダゴゲ・ナーバ・バリエ マグリ・ヤ
トメ・ラジゴ」

体に書いた文字が、魔方陣になり浮かび上がった。

「グオオオオオオオオ……」

獣のような雄叫びと共に、ファイの体が変化していく。

両手は細長くなり、先は二つに分かれ針がついている。

下半身はサソリのよう、左右に足が三本づき生え尻尾も生えている。

尻尾の先にも針がついている。

「これが、禁忌魔法なのか？」

ガンマが聞いたが答える事はなかつた。

「フハハハハ！！死ねええええ」

尻尾の先の針が、ガンマに迫る。

見た目はサソリいつことは……毒針？！

「危ない！！！」

ガンマを突き飛ばす。

ブシュツツツ

尻尾の針がスピアに刺さつていた。

「ガハツツツ」

「スピアード！！」

崩れ落ちるスピアをガンマが支える。

「フハハハハ！！！」

サソリのような姿になつた、ファイが高い位置から見下して叫ぶ。

「次は、お前だ」

禁忌魔法（後書き）

過去に触れるまでは書けなかつたので、次回に回します。

あと、雷竜方天戟の件も解決します。

スピアード&ガンマ>ソファイ(前書き)

反省点

- ・今回モンハンみたいだ…

スピアード&ガンマバウファイ

目の前にいる大きな敵に、ガンマは技を連発していた。

「ガンスマジック
バラライズブリッヂ
銃弾魔法・麻痺弾！！」

敵を痺れさせる効果をもつ弾丸だが、ファイには全く効いていない。

「こんな敵、倒せねえよ……

「……あきらめるな」

心の声が見破られたのかと思った。

「スピアード！お前大丈夫か！」

「大丈夫です。毒なんかで、俺は死にませんよ」

そうは言つたが、正直キツイ。

「俺が特攻します。援護してください」

刀を構えて言ひ。

「わ…分かった」

さて、どうやって「イイツを倒すか。

見た目はサソリのファイは、尻尾で攻撃を防いでいる。

つてことは……

「ガンマさん！尻尾に集中砲火してくださいー。」

「分かった！」

そう言いながら、ガンマは二丁拳銃に弾丸を装填する。

「ガンスマジック
銃弾魔法・貫通弾！」

二丁拳銃から放たれた弾丸は、ファイの尻尾に当たるがダメージを受けていない。

「追憶・剣閃！」

右の三本ある足の手前を斬つた。

手応えはある。

「何だア？」

しかし、ファイは無傷だった。

「クソツ！」

「フンー！」

ファイの尻尾の薙ぎ祓いで、刀がとばされる。

「チツ！」

無防備で敵の近くにいるのは危ない。

直ぐに離れようとしたが、尻尾で飛ばされた。

「うわあああつ！！」

「スピアードー！」

相変わらず弾丸を撃ち続けるが、効いていない。

「どうすれば……倒せるんだ？」

「ぬわあああ……」

ガンマが尻尾でどばされる。

「どうすれば……」

バチバチッ

何かの音がした。

バチバチッ

音がした自分の右手を見ると、紫色の雷が鳴っていた。

「これって……まさか？」

武器もなく、ファイの尻尾で狙われているガンマを確認した後

地面に刺さっている刀を手に取る。

刀の柄と切先を両手で持つ。

「頼むぜ……俺の魔法……」

眼を閉じて両手に意識を集中し、力を集める。

バチバチッ

眼を開けると、両手には紫色の雷が鳴っていた。

そして、その雷を刀にまとわせる。

「いいくせ……」

遠くでは、今まさにファイが毒の尻尾でガンマを刺す瞬間だった。

「届け……！」

刀を槍のように、ファイをめがけて投げる。

紫色の雷をまとった刀は、一直線にファイに向かっていく。

「消えろ…… フゴッ！…」

ファイの右目に刀が刺さった。

刀が刺さつたと同時に、雷がファイの体を包む。

そうか！

一
ガンマさん。
奴の弱点は雷属性の技です！」

そこへしながら、カツラの二丁拳銃を拾い投げる。

「やハ、一慶行抱あす！援護してくたわレ！」

房食を一にして、かこへも

住七之二

と言ふ
鉄に弾丸を装填した

「銃弾魔法・雷弾！！」

二丁拳銃から放たれた弾丸は防護した尻尾を突き抜け、生身の上半身へしつかり当たった。

その直後電撃が流れる。

「グワアアアアアツツ!!」

苦しむファイの体を昇り、生身の体を殴る。

もちろん、雷をまとわせて。

「ガハツ！」

ファイが血を吐く。

今がチャンス！

連打でパンチを叩き込む。

「ガンマさん！決めてください！！」

苦しむファイから離れ、ガンマに叫ぶ。

「ガンスマジック
銃弾魔法・最大出力！！」

一二丁拳銃が光っている。

「全魔力解放！！サンダーブラッシュ
雷弾！！」

激しい轟音が、ファイの体を襲う。

そして、ファイは音も無く崩れ落ちる。

禁忌魔法が解けたのか、普通の体に戻っている。

ドスッ

ファイとスピアが地面に落ちる。

「……やつた

スピアは振り返り、ガンマを見る。

「やりましたよ、ガンマさん。」

「ああ

ガンマも驚いている。

しばらく、自分達の勝利を喜んでいた。

そうだ…

「ガンマさん。軍隊の人、呼んでもらえますか？」

「ん？ ああ

ガンマが足を引きずりながら、街へ向かう。

そして、スピアは倒れているファイに近づく。

丁度ファイは、目を覚ましていた。

「…俺は、負けたのか？」

「……ファイ。一つ聞きたいことがある

返事はないが、気にせず話す。

「その禁忌魔法、どこで手に入れた？」

ファイは、何かを隠すように顔をそらした。

「…………黒い天使達のバロンだ」
ブラックエンジェルズ

その名を聞いた途端、体が震えた。

バロン。その名を持つ男はかつて、スピアの大事な人間を奪つた張本人である。

「俺は……バロンを含む、黒い天使達の奴らが恐れるような力が欲しいと思っていた……奴らの偉そうな態度には呆れていたからな」
ブラックエンジェルズ

ファイが語りだす。

「そんな時……バロンがこの禁忌魔法を教えてきた」

「バロンが？」

「…………奴らの力を借りる事だけはしたくなかったが……奴らが教えた魔法で……奴らを倒せば……いい笑いものになると思ったんだ」

ガハッと血を吐く。

「…………まさかこんな副作用があるとはな……」

スピア達の攻撃だけじゃない、何かのダメージを受けている。

まさか……

「……なあ子供^{ガキ}……こんなこと言つのは可笑しいのかもな」

副作用の効果だらうか、体に皺が増えてこる。

「…………俺死にたくねえよ…………」

そう言つた後、ファイの体はかつての若々しい体ではなく、まるでミライのようになつっていた。

二日後。

ハルジオンの病院でスピアとガンマは休んでいた。

ミハエルの情報によれば、ファイはミライのような体のまま評議院管理下の病院で隔離されているらしい。

息はしてこないが会話をできず、まさに生きる屍になつていた。

「なあ。お前、雷魔法使えたのか?」

「俺も、初めて知りました」

隣のベッドに寝ているガンマと、カーテン越しに会話をする。

「あれは多分、俺の魔法なんですね」

「……どういひ意味だ？」

「俺の刀には、ある人の魂が宿っているんです」

「！？」

「禁忌魔法・魂転生ソウルチエングを知つてますか？」

「ああ。人と人、人と動物の魂を入れ替える魔法だろ。だけど、物に魂が宿るなんて…」

「……その、ある人が使つてた魔法なんです。剣閃や十六夜は」

「じゃあ、お前は……」

「魔力なんてもたないただの子供ガキでしたよ」

しばらく無言が続く。

「妖精フェアリーの尻尾テイルには雷の魔法を使つ奴がいるのか？」

「はい」

「じゃあ、そいつに弟子入りでもして雷魔法を基礎から学ぶんだな

「ええ」

「次に会つときには、強くなつてろよ」

「解りました」

シャー

カーテンが開いた。そこには、入院服ではなく普通の服を着たガンマがいた。

「俺の方の怪我は治りが早いからな。先に行くぜ」

「はい。あ、今度フェアリー・テイルに遊びに来てくださいよ」

「わかった。じゃあな」

ガンマが背を向けて、病室から出ていく。

「あ、そうだ。スピアード」

「はい?」

「お前、敬語で喋つてるけど…俺も十四。同じ年だぜ」

そう言い、病室を去つていく。

「同じ年かよ…」

心の中でツッコミながら、睡眠をとる。

退院後、フェアリーテイルの雷の魔導士に弟子入りし

過酷な修行生活を行なつたのは、また別のお話。

六年 前編
・ 完・

スピード＆ガンマバウファイ（後書き）

六年前編完結ですね。

雷の魔導士はラクサスです。

次回からは、ルーシィやらなんやつ出でます。

鉄の森

フェアリー テイル ギルド内

みなさん初めまして。私の名前はルーシィ。

最近ここに入つたばかりの星靈魔導士です

フェアリーテイルつてギルドはとにかくいつもドンチャラン騒いで、
でも、とても楽しいギルドなの。

今もナツビグレイが大喧嘩。

あれ? わたし出ていった口キが戻ってきた?

「ナツ! グレイ! マズイぞ! ...」

「 「あ?」

「エルザが帰つてきた! !」

「 「ええ――――――――? ? ? ?」

え? ちょっと... 何? ギルドの中が急に慌ただしくなつてゐんですけど。

ズシン! ズシン! ズシン!

何、この足音。

みんなの顔が引きつってるんだけど??

そして、入口から大きな角を抱えた赤い髪の女性が入ってきた。

「今戻った。マスターはおられるか?」

「お帰り!!マスターは定例会よ」

赤い髪の女性の問いにミラが答えた。

「ミラさん。今はギルドの看板娘だけど、昔は相当暴れてたらしいの。

「エルザ…その、バカでかいのは何なんだ?」

エルザと呼ばれた女性に話しかけたのは、マックス。

砂の魔法を使うの。

「ん?これが…討伐した魔物の角に、地元の者が飾りを施してくれてな……綺麗だったのでここへの土産にしようと思つてな……迷惑か?」

「い…いえ!滅相もない!!」

両手を振りながら、マックスが後ろに下がっていく。

「それよりお前たち!」

エルザ声に、ギルド内が静まつた。

「また、問題を起していいようだな。マスターが許しても私は許さんぞーー。」

ヒィイイツと何処からか聞こえたのは気のせいかしら?

「力ナ！」

۱۰۰

「なんという格好で飲んでいる！コップを使え！」

「ビジター！」

一 ピケツ!

一 踊りなら外でやれ！」

アカハ!

۱۰۷

吸殻が落ちてしまふ！少しば禁煙しちゃ！」

「ナブ！」

לענין ...

「依頼板の前をウロウロするなら仕事に行け！」

「マカオー！」

「はい？」

「すまん間違えた」

「間違えるなよ……」

「まったく……世話がやけるな。今日のところも言わずにあつてやるわ！」

「ずいぶんいろいろ言つてたよくな……

「な……何、この人

「エルザー……とつても強いんだ！」

この猫はハッピー、世にも奇妙な喋る猫なの。

この前ハッピーのことを見つたら

「スピアの刀も喋るよ……」

って。何言ってんのか分からないうわ。

「といふで、ナッシグレイはいるか？」

「あい」

ハッピーが指さす方向に、肩を組んだナッシグレイがいた。

「や……やあ、エルザ……オレたち今日も仲良し……良く……や……やつてゐ
ぜ……」

「あい……」

「ナツがハッピーみたいになつた……」

あのナツが？信じられない！

「やうか……親友なら時にはケンカもあるだらう……しかし、私はそつ
やつて仲良くなつてゐるとこを見るのが好きだぞ」

「あ……いや……こつも言つてゐるナビ……親友つてわけじゃ……」

「あい……」

こんなナツ見たことないわ……

「ナツもグレイもエルザが怖いのよ」

「////やんー」

「ナツは昔、ケンカを挑んでボ「ボコ」にされたやつたの」

「まさかあー？あのナツが！？？」

「グレイは裸で歩いているとこを見つかつてボコボコ……」

「それは自業自得な……」

「ロキはエルザを口説ひつとして半殺し」

「……」

「でも、エルザも昔ボコボコにされた事があるのよ」

「誰ですか?」

「スピアード・フルミネ……今は仕事でいいけど」

スピアード。何か名前からして怖そうな……

「一人とも仲が良さそうによかった……」

「実は一人に頼みたいことがある」

「?」

「仕事先で少々やつかいな話を耳にしてしまった。本来ならマスターの判断をおおぐトコなんだが……早期解決がのぞましいと私は判断した」

「二人の力を貸してほしい……スピアも後から合流する……ついてきてくれるな」

「え?」

「はい!?」

ナツとグレイが声を上げると、ギルドが騒がしくなった。

「ど…どいつ事…?」

「あのエルザがスピア以外を誘つなんて初めてじゃないか…」

「こんな角もつ怪物倒す女だぞ…」

騒がしい中、エルザが言つた。

「出発は明日だ…準備しておけ…詳しへは移動中に話す」

「「行くなんて言つてねえ～～」「

「行かないのか？」

凄い形相でエルザが睨む。

「「行きます！」

「エルザとスピア。一人だけでも最強なのに…ナツとグレイ…」

「どうしたんですか、ミラさん?」

「これって…フェアリー・テイル、最強チームかも…」

マグノリア駅 列車内

「あ…あの…お客様…」

乗務員の一人が爆睡している青年に声をかけている。

「ガアアアアアアア… プスウウウウツツツ」

すんごい寝てる。起こすのが忍びない。

「お姫様……終点ですよ…」

「すまない」

乗務員の後ろから声がした。

「ウチのギルドの者だ」

「あ、エルザさん。そうでしたか」

エルザは、爆睡する青年を担ぎ列車を降りた。

「すまない。エルザ」

列車で爆睡していた青年、スピアードは頭をかきながら言つ。

俺がフェアリー・テイルに入つてもう六年になる。

「気にするな。こつものことだ」

いや、気にしますけどね…

ナツ達が待っているのは、線路を挟んだ向こう側のホーム。

なんかナツヒグレイ、ケンカしてんな。

ハッピーと…誰だあの娘？^コ

「すまない待たせたか？」

エルザが声をかける。

「荷物多っー！」

凄いシッ ハリだな、田玉でてるわ。

とてもマネできん。

「ん？君は昨日、ギルドにいたな…」

「新人のルーシィと聞いてます。ハリさんに頼まれて、同行する事になりました。よろしくお願ひします」

なるほど新人か。てか、胸大きいな…

「私はエルザだ。よろしくな

「あ、俺スピアードだ。よろしくなルイージ

「いや…あの…ルーシィです…」

ルーシィ？もうじりつけでもいいや。

「そりゃ……ギルドの連中が騒いでいたのは君の事か。雪山に住む地面を掘る変態傭兵、ゴリラの息子を倒したとかなんとか……頼もしいな」

「何か色々混ざります！」

やるなルイージ！！

「今日は、少々危険な橋を渡るかもしれないが、君なら大丈夫だな」

「危険…………？」

危険なのかー俺も聞いてないぞ。

「何の用事かはしらねえが、今回まつこでつてやる……条件つきでな

条件？

「バ……バカ……オ……オレはエルザの為なら無償で働くぜ……」

グレイ怖がりすぎだろ。

エルザなんてカワイイもんだぜ。

「帰つてきたらオレと勝負しろ……！」

「…………えつ？」

ルイージ……じゃなかつたルー・シイ、ハッピー、グレイ

もちろん俺も驚いた。

「あの時とは違う…今ならエルザを倒せる…それにスピアー！お前もだ…！」

え、俺も？

「オ…オイ…はやまるな…死ぬぞ…絶対…！」

グレイ、落ち着けよ…

「確かにお前は成長した。私は、こわさか自信がないが…いいどう受け立つ」

「俺は、遠慮しつくわ

「何だスピア、俺にやられるのが怖いのか？」

「なわけあるか。俺は、この後もすぐ仕事に行くんだ…お前と戦つてゐ暇なんかねえよ。それにお前、俺に一度も勝つたことねえだろ！」

「だからやるんだ！」

「よさないかなッ。スピアはお前ほど暇じゃないんだ…グレイも私と戦いたいのか？」

「ブンブン」

首飛んでいくぞ、そんなに振つたら。

列車内

「はあ…はあ…はあ…」

凄く酔つてゐるな、ナツ。

いや、俺は酔わないけどな何だか眠い……

「あ、あの…スピアードさんまだここ行つたんですか？」

エルザ、グレイ、ハッピーが指で上を指す。

「グウウウウウウウウスピイイイイイイツツ」

「寝てる…！」

列車の金網でスピアードが寝ている。

「スピアは乗り物に乗ると何故か寝てしまうんだ

寝てしまつただ…

「仕事が終わるたびに駅に迎えにいかないと、一生帰つてこないんだよー！」

「//トちゃんが迎えに行くのがほととどだな

ましな人だと思ったのに、やっぱりフュアリー・テイルの一員だね…

「もういや…あたし…フュアリー・テイルでナツ以外の魔法見たことないかも。ヒルザさんはどんな魔法を使うんですか？」

「ヒルザでいい」

「ヒルザの魔法はキレイだよ！血がいっぱいであるんだ！相手の

「キレイなの？それ…」

想像すると…恐い…

「スピアの魔法は雷属性の中で最も破壊力を持つ、紫電を使うんだ…見せたほうがいいだろ？」

いや、でもスピアードさん。寝てますよ…

目の前にスピアの右手が現れ、紫色の雷が鳴る。

「ヒィイイ！」

「スピアは寝ても話は聽けるんだよー」

なんて能力…

「グレイの魔法の方が綺麗だよー」

あれ、今どこから声が？

「せうか？」

そう言ってグレイは左の手の平に右の拳を合わせて、冷氣を集中させた…

そこには、フロアリー・テイルのマークが氷で作られていた。

「うわあつー

「氷の魔法だよー。」

また、声が…

「あの、グレイ。さつきから変な声しない?」

「変な声?」

「アレのことじやないのか?」

エルザが囁つ。

「ああ」

グレイは真上を指した。

「スピアが背負つてる刀があるだろ。あが喋つてんだ

「うわあおおおーーーー。」

「嘘じゃないよ」

え？

真上を見て話かける。

「本当に？」

「本当だよ」

「私たちも初めて知った時は驚いた」

いやいや、驚くってレベルじゃないでしょ……

「どうでもいいけど、そもそも本題にはいろはモルザ……」

「どうでもよくない……！」

「一体、何事なんだ？お前が人の力を借りるなんて、よほどだぜ」

「そうだな……話しておこう……」

エルザの膝で沈むナツに目をやり、話し始めた。

「先の仕事の帰りだ。オニバスで魔導士の集まる酒場に寄った時、少々気になる連中がいてな……」

エルザの回想

「『ハラア……酒遅せえぞ……』

席に座り、オーバス特製ケーキを食べていると男の声が聞こえた。

「つたくよお、なにモタモタしてんだよ……。」

「す…すこません」

その男はネズミ顔の大男だった。

「ビアード、そうカツカすんな」

「うん……」

同じテーブルに座っている葉巻を吸っている男と、太った男が声を上げる。

「これがイラつかずにいれるかつてんだ!! セつかくララバイの隠し場所を見つけたつてのに、あの封印だ!! 何なんだよ!! まったく解けやしねえ!!」

「バカ……声がでけえよ……」

「うふ、うぬせ……」

「くそお……」

「あの魔法の封印は人数がいれば解けるなんてもんじやないよ……」

「あ?」

四人の中で、今まで黙っていた男が声を上げた。

「後は僕がやるから、みんなはギルドに戻つてるといよ……エリゴールさんに伝えといて。必ず三日以内にララバイを持って帰るつて」

「マジか！？解き方を思いついたのか？」

「おおー…さすがカゲちゃん…！」

すると、カゲと呼ばれた男は酒場を出ていった…

氣のせいか、その後を黒フードの男が尾行つけていた。

エルザが話終わった。

「ララバイ？」

「子守歌…眠り魔法か何かかしら？」

「わからない…しかし、封印されているという話を聞くと、かなり強力な魔法だと推測できる」

「話が見えてこねえな…得体の知れねえ魔法の封印を解こうとしてる奴等がいる……だかそれだけだ。仕事かもしれねえし、なんて事ねえ」

「馬鹿だな、グレイ」

真上から声がした。

「「ひねつー・スピアー起きたなら言えよー・ビックリするだらうがー・」

「ビックリせぬつもりで言つたんだよ。ヒリゴールだぞ、死神エリゴール」

列車がオーバス駅についた。他の乗客が荷物を持ち、下車している。エルザ達も、荷物を持ち列車を降りる。

「魔導士ギルド鉄の森のエース、死神エリゴール」

「し…死神！？」

ルーシイ驚き過ぎたる。ビビリルーシイ略してビリー…

「ああ。暗殺系の依頼ばかりを遂行し続けついた字だ…本来、暗殺依頼は禁止されているんだが、奴らは金を選んだ」

「暗殺依頼…」

「そんなもん、依頼する奴がいる時点で許せねえな…」

そう言い、エルザに目を向ける。

話すのが疲れたから、代われサインだ。

「結果、六年前に魔導士ギルド連盟を追放され現在は闇ギルドとい

うカテ「」に分類されている…」

闇ギルド。俺がこの世で一番嫌いなもんだ。

「闇ギルドおーーー?」

「ルーシー汁いつぱいでてるよーーー。」

「汗よーーー。」

汗なのか。俺も汁かと……

「なるほどなあ…」

グレイ…服きろよ…

「ちょっと待つてーー追放つて、処罰はされなかつたのーー?」

「されたさ。当時、鉄の森のマスターは逮捕され
ギルドは解散命令を出された…しかし。闇ギルドと呼ばれているギ
ルドの大半が解散命令を無視して活動し続けているギルドの事な
れ」

「……帰らつかな…」

「出た…」

「不覚だつた…あの時、Hリゴールの前に立つていれば
全員、血祭りにしてやつたものを…ーー。」

「ヒィイイ！」

「そうか…その酒場にいた連中だけなら、エルザ一人で何とかなつたかもしけねえ…だがギルド丸々相手となると…」

グレイの目線が俺に向ぐ。

「いや…鉄の森は正規ギルドの頃から、数が多いので有名だつたギルドだ。流石に俺でも、一人でではキツイな」

スピアの言葉にエルザは頷く。

「奴らはララバイなる魔法を入手し、何かを企んでいる…私はこの事実を看過することはできないと判断した…」

「鉄の森に乗り込むぞ…！」

「面白そつだな」

「新しい技でも、見せてやるよ」

「新しい技なんかないでしょ…」

エルザ、グレイ、スピア、そして刀のアオイの順で言った。

「来るんじゃなかつた…」

ルーシイが肩を落とす。

「汁出すぎだつて」

「汁言うな…」

「で…鉄の森の場所は知ってるのか?」

「それを、この町で調べるんだ」

「雲をつかむような話だな…」

「あれ?」

「どうしたの?ルーシイ」

町を歩いていると、ルーシイが何かに気付いたように声を上げた。

「嘘でしょー?…ナツがいないんだけど…!…!…!

「…」「あ…」「…」「…」

俺、エルザ、グレイ、ハッピーも気付いた。

あ～～～!!…忘れてたああああ!!…

「話に夢中になるあまりナツを置いてしまった…私の過失だ!
とりあえず、私を殴つてくれないか!!」

毎度のことだが、真面目だな…エルザ…

「という訳だ!列車を止めろ…!」

「え… もうこの辺？」

エルザ… こきなり駅員にそんな事言つても…

「フフアリー・テイルの人はやつぱ、みんな、こーゆー感じなんだあ…」

「オイーおれはまともだぞ…」

いや、グレイ服着りよ…

「仲間の為だ、分かつてほしい」

「無茶言わんで言わんで下わいー降りそくなつた客一人の為に、列車を止めるなんて！」

エルザが駅員の後ろにあるレバーに手をやる。

『緊急停止信号』

おい…まさか…

「ハッピー」

「あいわーー」

「うふふとお…」

ジココリコココ

激しいベルの音が響く。

「よし、ナツを追つぞ……すまない、荷物をホテル チリまで頼む」

いや、駅員に頼むなよ。

列車を走つて追うのは無理だよな……つて、

「エルザ……あの魔導四輪を使おう……」

駅前に止まつていた魔導四輪に飛び乗る。

エルザが運転席に、ルーシイとハッピーも慌てて乗る。

「おい！オレ乗つてねえぞ……」

グレイが屋根に飛び乗る。

「飛ばすぞ……」

エルザ…飛ばしそぎだ……あれ？何だか眠くなつてきた…
「俺の車～～～！」

そんな声が聞こえた気がした。

鉄の森（後書き）

なんか俺も眠くなってきた……

魔導四輪は借りたんですね（前書き）

エリ、ゴールのキャラ崩壊？

魔導四輪は借りたんですね

「いつも。妖精の尻尾のスピアードです。

現在、列車から降りそこなったナツを魔導四輪で追いかけています。

俺が寝ているその頃、列車の中では……

「はあ……はあ……はあ……はあ」

ナツは、席に座っていた。そして、酔っていた。

そこに、誰かが声をかけた。

「お兄さん、ここにいる?…あら?…つらそうだね、大丈夫?」

その時、その男はナツの右肩のマークに気付いた。

「あ、フェアリー・テイル…正規ギルドかあ……うらやましいなあ……」

「…」

「…あ?」

「ゴッ…!」

すると、突然、その男がナツの顔に蹴りをかました。

「正規ギルドだからって調子乗つてんじゃねえよ…つらう、フェア

リーテイルの事を何て呼んでるか知ってる？妖精だよ……ハエ……ハエたたき！！」

ペシペシとナツの頭を叩いて遊ぶ男…

その時、両手に炎を纏つて、ついにキレたナツ。

だつたが……

列車が揺れた途端、

「おふっ…」

酔つて、両手の炎が消えた。

「ひやは！なんだよ、その魔法！……魔法ってのは……」

その時、男の足元の、影が伸びて

ナツにアッパーを喰らわした。

「うぐうー。」

「うう、使わなきやーー。」

「く…くそ。」

列車内では完全にナツが不利だったが、その時、列車が急に停車した。

おかげで、ナツと男が転げ回った。

その時、男の懐に入っていた何かが落ちた。

三つ皿のドクロをした笛だ。趣味悪いな…

「止まつた……ん? 何だこの笛?」

ナツが起き上つた。そして、男の落とした笛に気付いた。

「見たな!」

男が、しまつたといつよつな顔をした。

だが、ナツは笛に興味を示さなかつた。

「うぬせえ… やつあはよくもやつてくれたな…」

「ゴホッ!

右手に炎を纏い、男に重い一撃をお見舞いした。

「ぐもつ…」

情けない声を上げ、男が吹つ飛び。

「ハエパンチ!」

「テメー…」

男が起き上った。

その時、アナウンスが流れた。

「先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。間もなく発車します。大変ご迷惑をおかけしました」

「マズ……逃げよ！」

「逃げすかあ！……アイゼンヴァルトに手出しだんだ！ただで済むと思うなよつ！ハエがあつ！……」

「いっちも、てめえの顔覚えたぞ……さんざん、フェアリー・テイルをバカにしやがって！」

その時、列車が動き出した。

「今度は外で勝負してや……うふ……」

「とつー！」

ガシャアー！！

そして、走る列車の窓からナツが飛び出した。

「おわあああああ！」

列車の横に魔導四輪が並走していた。

「ナツ！？」

運転をしているエルザが叫んだ。

「何で列車から飛んでくるんだよーーー！」

「どーなつてんのよーーー！」

ナツが飛んできて、屋根にこるグレイのドーンに直撃した。

「チーンーーー！」

キキイイイイイー

魔導四輪のブレー音で、俺は田を覚ました。

「バカモノおつーーー！」

エルザがナツを殴っている。

何があつたんだ？

「鉄の森は私たちの追つている者だーーー！」
アイゼンガル

「そんな話初めて聞いたぞ

「なぜ、私の話をちゃんと聞いていないーーー！」

酔つてたからじゃないか？

「さっきの列車に乗つているのなら今すぐ追つやーーー！」

「ついでながら、ヒルザはUEプラグを手首に付けた。

UEプラグは魔導四輪、魔導一輪など走らせるための魔力を運転
者からとる為のプラグだ。

「ナツ、そいつどんな特徴してたか？」

俺はナツに聞いた。

「あんまり特徴なかつたな……あ、三つ田のドクロの笛を持ってた

三つ田のドクロ……笛の//なら似合ひやうだな……

「三つ田の……ドクロの笛……」

ん？どうしたルーシィ

「ううん……まさかね……あんなの作り話よ……でも……
もしもその笛が呪歌だとしたら……子守歌^{ララバイ}……眠り……死……」

「その笛がララバイだ……呪歌^{ララバイ}……死の魔法！」

「何ー？」

死の魔法だと？

「あたしも、本でしか読んだことないんだけど……禁忌魔法に呪殺つ
てあるでしょ？」

禁忌魔法だと……？

「ああ……その名の通り、対象者を呪い『死』を『与える黒魔法だ』

ルーシィの問いにエルザが答えた。

「呪歌^{ララバイ}は、もっとおそろしいの……その笛の音を聞く者全てを呪殺する……集団呪殺魔法ララバイ……」

「マジかよ……！…

「集団呪殺魔法だと？そんな物がエリーゴールの手に渡つたら何をされるか分からん！…すぐに追うぞ！」

エルザの命令と共に、魔導四輪に飛び乗り列車を追つた。

やべ……眠くなってきた……

クヌギ駅

線路を挟んだ丘の上で、俺は田を覚ました。

「あいつ等、列車を乗つとつたの！…？」

ルーシィが声を上げる。

「みたいだね」

ハッピーが答える。

「馬車や船とかならわかるけど列車つて……」

「あい……レールの上しか走れないし、奪つてもそれほどのメリットもないよね」

「ただしスピードはある」

田が覚めた俺は、会話に参加した。

「何かをしでかす為に、奴らは急がざるを得ないといふとか?」

屋根にいるグレイが、質問してきた。

「たぶんな……グレイ服着るよ」

「また脱いだの?」

ルーシイのツツコミは最強だな……

「でも、軍隊も動いてるし捕まるのは時間の問題なんじゃない?」

ルーシイが窓から顔を運転席のエルザに向ける。

「……だといいんだがな」

何だか、騒がしいな……

目が覚めると階段があり、沢山の軍人が倒れていた。

「…………ん?」

俺は、グレイの背中で寝ていたようだ。

「やつと起きたか…オシバナ駅だ。たぶんホームに鉄の森の連中が
いるはずだ」

「魔導士相手に、軍の小隊かよ! 話にならねえだろ!」

軍の上層部はそんなことも解らねえのか? 下手すりや、死ぬんだぞ!

「急げ!! ホームはこっちだ!!」

グレイの指さす方に、エルザを先頭にして走る。

ホームは広かつた。先程のクヌギ駅のホームとは天と地の差がある。

「やはり来たな妖精の尻尾」

アイツがエリゴールか……

「な……なに……この数……」

ルーシイが震えている。

「…………ざつと見、八十人ってとこだな……」

実際はもつと居るのだろう。

「待つてたぜえ」

列車の上に座っているヒリゴールが声を上げた。

「奴はエリゴールか？」

エルザが聞いてきた。

「ああ」

「貴様等の目的は何だ？返答次第ではただでは済まさんぞ」

駅全体が揺れる。ヒルザの魔力が上がっている。

「遊びてえんだよ…仕事もねえし、ヒマなんだよ

ふざけやがって……

再び駅が揺れる。さつきより、大きい揺れだ。

「スピア……少し魔力を落とせ。駅が壊れる」

エルザが俺に向かっていつ。

「金髪の白い服……刀……そうか……お前が、闇ギルド潰しのスピアードだな……」

エリゴールが何かに気付いたよつて囁つ。

「だったら何だ？」

「いや……お前のおかげで同業者も減つたモンでね」

「知るか、そんな事」

エリゴールを睨む。

「ククク……良い眼だ……悪を憎む……闇を恨む眼だ」

「……お前等の目的は何だ？」

「まだわからんねえのか？駅には何がある」

駅にあるもの……列車……キヨスク……

エリゴールは空を飛んだ。

「飛んだ！？」

ルーシイが声を上げる。

「風の魔法だ！……」

ハッピーが答える。

エリゴールはそのまま飛んで、スピーカーの上で降りた。

列車…キヨスク…ルーシイ…変…ハッピー…猫…風の魔法…スピーカー…

力…

スピーカー？！まさか！！

「「呪歌^{ララバイ}を放送するつもりか！？？」

俺とエルザは同時に声を上げた。

「ええ？」

「何だと？」

「ふははははっ！…この駅の周辺には何百…何千ものヤジ馬共が集まってる。いや…音量を上げれば町中に響くかな…死のメロディが」

「大量無差別殺人だと！…！」

エルザが叫ぶ。

「これは肅清なのだ…権利を奪われた者の存在を知らずに権利を掲げ生活を保全している愚か者へのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ…よつて死神が罰を与えてきた。死という名の罰をな！！」

「そんな事したって権利は戻つてこないのよ…！…てゆーか元々自分たちが悪いってのに…あきれた人たちね」

ルーシイが正論を言った。

「ここにまで来たらほしいのは権利じゃない権力だ……権力があれば全ての過去を流し、未来を支配する事だってできる」

「バカかお前」

俺はエリ、ゴールに向かつていう。

「過去を流す？未来を支配する？人間はどんなに辛い過去でも、それを受け入れ未来に進んで行くんだ！！進む事をあきらめた奴が、それを人のせいにするんじゃねえ！…」

「ククク…良いこと言つじやねえか。でもよ、俺等は権力がねえと進む事もできねえんだ…カゲヤマ…」

エリ、ゴールに名前を呼ばれた、カゲヤマは魔方陣を展開させ左手を床につけた。

「残念だな妖精ハナども……闇の時代を見る事なく死んじまつとは…！」

カゲヤマの影がルーシイを襲う。

「きゃあ

間に合わない…！」

「やつぱりオマエかあああ…！」

ナツの声と共に、カゲヤマの影が切れた。

「復活…！」

「今度は地上戦だな！……」

カツコつけやがつて……

「おー！なんか、いっぱいいる

「敵よ敵！！ぜんぶ敵！！」

「へつーおもしろそうじゃねえか！…」

ナツが左の手の平に、右手の拳をぶつけた。

「『アーリーテイル
妖精の尻尾最強チームよ！覚悟しなさい！…』

ルーシイが指を差しながら言いつ。

「後はまかせたぞ……オレは笛を吹きに行く。身のほど知らずの妖精
どもに……アイゼンヴァルト鉄の森の……闇の力を思い知らせてやれい！」

そういう残すとエリゴールは、恋を割り消えた。

「逃げるのか！エリゴール！…」

エルザが叫ぶ。

「くそつー向こうのブロックか！？」

「ナツ！グレイ！一人で奴を追うんだ！」

「「む？」」

「お前たち一人が力を合わせれば、ヒリゴールに負けるはずがない」

「なんでグレイなんかと…」

「なんでナツなんかと…」

「ブツブツ文句言つてゐるぞ……」

「「！」は私とスピアでなんとかする」

「あたしは戦力外なのね……」

「オイラもだよ…」

「なんでグレイなんかと…」

「なんでナツなんかと…」

「聞いてくるのかつ…！」

「「も…もちろん…。」」

エルザが一喝すると、ナツとグレイは肩組みして仲の良いフリをした。

「行け…。」

「「あこれー」」

二人は走り去った。

すると、ナツとグレイの後を追いかけるようにカゲヤマと

もう一人がホームを出た。

「こいつ等を片づけたら、私たちもすぐに追うぞ……」

「了解

「うん

「たった三人と猫で何ができる……いくら闇ギルド潰しだらうが、この数は無理だろうなあ？」

「うるせえよ……

「行くぞ、スピア

「剣が出てきた……魔法剣……」

エルザの右手に魔方陣が展開され、剣が現れた。

「めずらじくもねえ……こちにも魔法剣士はぞろぞろいるぜえ……！」

鉄の森の連中が武器を構えて、襲ってきた。

「ああ

俺も刀を抜く。

まず、エルザが集団に突っ込んだ。

ズギヤギヤギヤギヤギヤ－！

バシュツツツツツツ－！

流石エルザ。たつた三秒で、十五人は倒したな。

「チツ！遠距離魔法とびどりがくでもくらえ」

敵の一人が魔方陣から魔法弾を発射しようと、構えた。

エルザは剣を、槍に換装した。

「おーい！」

一人を槍で倒し、着地すると同時に

双剣に換装した。

スパアアアアアアン－！

また十人倒したな…

さらに、斧に換装する。

「斧－？」

敵の連中が驚いている。

「面倒だ、一掃する」

エルザの鎧がはがれ始めた。

「…………うひょーーーー！なんか鎧がはがれてくーーー！」

敵の目がハートになつていてる。

まあ、当然だな……

後ろで、ハッピーとルーシイが会話している。

エルザの魔法の説明でもしているのだろう。

「舞え剣たちよ」

多数の剣が、エルザの背後で旋回している。

サークルソード
「循環の剣！！」

シユピイイン

ズバババババ！！！

旋回する剣が、敵を切り刻んでいく。

十五人……って

「エルザ！一人多いぞ！！」

四十一人、一人才ーバーだ。

「細かい事は気にするな……後は任せた」

すると、エルザは元の鎧に戻つた。

「解つた……」

そう言い、残りの奴らに突つ込む。

「追憶・剣閃！！！」

ズバババババッソーンソーン！！！

「何だコイツ！！？たつた一撃で二十人も倒したぞーー！」

後、十三人といつたところか。

刀に、紫電をまとわせる。

「追憶・雷神剣！！！」

バチバチバチッツッ！！！

ふう……

「ひーー！」

一人逃げていく。

「エリーゴールの所に向かうかもしれん。ルーシィ追うんだ」

「ええ～～～！あたしがつ～～？」

「頼む～～！」

「はい～～～～～！」

ルーシィが走っていく。

「ハッピー、お前も行け」

魚を食べようとしている、ハッピーに言った。

「え～～オイラも？」

「今度、特上の魚を持って帰ってくるからよ

「あいさ～～～！」

ハッピーも飛んで行く。

「さて、エルザ…魔導四輪に循環の剣のコンボ。流石に魔力が無い
だろ」

エルザを支えながら言ひ。

「ああ。私は、スピアのよう」「一人分の魔力はないからな

「嫌味か？」

「いや……今、アオイは……」

エルザが俺の背中の刀に目をやる。

「今は寝てる。剣閃に雷神剣を使ったから、魔力の消費が激しいんだ

「そうか……」

それから、俺もエリゴールを捜索したが一向に見つからない。

直ぐに、駅のホームに戻ったがエルザは居なかつた。

「おい、エルザはどうに言つた?」

倒れている鉄の森の連中に聞いたが誰も知らない。

今度はエルザを探していると、ちょうどメイド服の女が

地面を掘っていた。

「あー、スピアが来たよー。」

「何があつたんだ?」

見ると、ナツとグレイは怪我を、カゲヤマって奴は大怪我をしている。

「おし……あの穴を通りてくぞ……」

何でだ？普通に出ればいいじゃん。

穴を通り、駅の外に出ると駅が風で囲まれていた。

「何だ、コレ？」

「ヒリゴールの魔法、魔風壁だ」

俺の質問にグレイが答えた。

「ナツとハッピーはどうした？」

エルザが辺りを見渡しながら言つ。

「ナツの事だ、ヒリゴールを追いかけたんだろう」

グレイが言つ。

つて、服着ろよ。

「よし、追いかけるぞ……」

「追いかけるつてどうするの？」

ルーシイが聞いた。

「早く乗れ！！」

エルザが魔導四輪の運転席に座っている。

「エルザ……それどうしたんだ？」

俺が聞いた。

「借りたんだ……」

本当かよ？

それから、魔導四輪に乗りナツを追いかけた。

眠い…

ヤレバ書の悪魔（前書き）

早く、スピアードの過去話が書きたい

ゼレフ書の悪魔

「んにちは妖精の尻尾のルーシィです。

今、エリゴールを追っているナツとハッピーを追っています。

つて言うか、追いつきました。

「ナツ～～

ルーシィの声で俺は目を覚ました。

エリゴールが倒れている。ビックやら、決着がついたよつだ。

「そ……そんな！！エリゴールさんが負けたのか！？」

カゲヤマが驚いている。

「さすが、ナツだな」

まさか、あのナツがエリゴールを倒すなんて、驚きだ。

「こんな相手に苦戦しやがって。妖精の尻尾の格が下がるぜ」

グレイがナツに突っかかる。

グレイ、今日誰かと戦ったのか？

「苦戦？どこが、圧勝だよ。な、ハッピー」

「微妙なトコです」

微妙なんだ……

「おまえ…裸にマスクって変態みてーだぞ」

「おまえに言われたらおしまーだ

「もつともです。

「ルーシィ、服貸してくれ

「何があたしなのーーー?」

ナツが俺を見てくる。

「いや、貸さねえよーーー?」

「何はともあれ、見事だナツ。これでマスターたちは守られた。ついでだ…定例会の会場へ行き、事件の報告と笛の処分についてマスターに支持を仰ぐ」

エルザの提案が、最善だな。

「よし、行くか

グレイが言う。

「また、車かよ……」

また寝ちまつじやんかよ。

h
?

「危ない！！」

俺の声と共に、ナツ、グレイ、エルザ、ハッピーが反応する。

反応が遅れたルーシイを、ハッピーが引つ張る。

直前までルーシイが居た場所を、魔導四輪が疾走する。

運転しているのはガケヤマ テラハイを持っている

「油断したな、
妖精ども。笛は…呪歌は…」だーーー。やれまあみーーー

カゲヤマつて……ええええ？？

「あんのヤロオオオオー！」

「何なのよ！助けてあげたのにーーー！」

「追うぞ！！」

「おいたー！」

「走るのかよー！」

全員が一斉に叫んだと同時に、走り出す。

クローバーの町 定例会会場の裏

カゲヤマは、窓に映る大勢の人物を見て一息つく。

「（よし…定例会はまだ終わっていないみたいだな。この距離なら十分呪歌^{ララバイ}の音色が届く。ふふふ…ついにこの時が来んだ…）」

ポン

肩に手が置かれた。

ビクビクしながら、後ろを振り向くと

一人の人物がいた。

「（マカロフ…！…いつ…妖精^{フェアリー}の尻尾^{テイル}…つづづく妖精^{ハエ}…）」

「あ…あの…」

「ん？」

「一曲…聞いていきませんか？誰かに聞いてほしいんです」

ララバイを構えて言つ。

「気持ち悪い笛じゃのう」

「見た目はともかく、いい音が出来るんですよ」

「…………急にこんな歌うじや。一曲だけじゃぞ」

「ええ…（勝つたー）」

「よおく聴いてくださいね」

その時、頭の中で記憶がめぐる……

「（正規のギルドは、どうもくだらねえなあーーー）」

「（能力、低いクセにイキがるんじゃねえってのーーー）」

ギルドのメンバーの声が頭に響いた

「（これは、オレたちを喰らい闇へと閉じ込め……生活を奪いやがった魔法界への復讐なんだーーー）」

次は、エリックの声だ……

その時、駅でルーシィとか言つ奴が言つてた事が響いた。

「（そんな事したつて権利は戻つてこないのよーーー）」

ドクン……

次は、エルザが魔風壁の事で言つてた事……

「（カゲー！お前の力が必要なんだ！）」

次は、駅でナツが言ってた事だ……

「（同じギルドの仲間じゃねえのかよーーー）」

クッ……何なんだこれは……！！

「いたーーー！」

グレイが指をさす方向に、マスターとカゲヤマがいた。

「じつちゃんーーー！」

「マスターーーー！」

「しつ」

「わーーー！」

「今いいトコなんだから見てなさい。てかあんたたち、かわいいわ
ね……ウフ」

「な……何この人！？」

「ブルーベガサス
青い天馬のマスターーーー！」

「あら、エルザちゃん大きくなつたわねえ」

「お久しぶりです」

「スピアード君もようかわいくなったわねえ〜」

その時、マスターの声が聞こえた。

「どうした？早くせんか」

カゲヤマは震えている。

「いけない！！」

エルザが駆け出をうとする。

「黙つてなつて。面白ホトコなんだからよ」

「四つ首の番犬のマスター！？」

ルーシイが叫んだ。

「ホールドマイイン！？」

エルザが気付いたようだ。

「お久しぶりです」

その時、再びマスターが声を上げた。

「ああ」

「（吹けば…吹けばいいだけだ。それで、すべてが変わる…）」

「何も変わらんよ

「…」

「弱い人間はいつまでたつても弱いまま。しかし、弱さの全てが悪いではない。もともと、人間なんて弱い生き物じや…一人じや不安だから、ギルドがある、仲間がいる。強く生きる為に寄り添い合って歩いていく。不器用な者は人よりも多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれません。しかし、明日を信じて踏み出せば、おのずと力は湧いてくる。強く生きようと笑つていける…そんな笛に頼らなくても……な」

「（やすがだ…すべてお見通しだったか…）」

「参りました

マスターの前にカゲヤマは膝をついた。

「マスター！」

「じーちゃん…！」

「じーちゃん…！」

エルザ、ナツ、グレイが声を上げ、マスターに近寄った。

その後を、ルーシィとハッピーが追いかける。

「ぬおおおーっなぜこの二人がこじるー？」

「じつちちさん、スゲエなア」

ナツがマカロフの頭を叩く。

「せう思ひのならペシペシせんぐれい

「一件落着だな」

「グレイ、服きりよ」

「あいー！」

「ホラ……アンタ、医者行くわよ」

ルーシイがカゲヤマに言つ。

「……」

「よくわからないけど、アンタもかわいいわよ

「カカカ……どいつもこいつも、根性のねえ魔導士どもだ

ビビからか、声がした。

人間の声じゃないな……誰だ……？

「やがてヤンできだ。ワシが自ら檢つてやねつ」

笛から煙が上がつていき、巨大な化け物が現れた。

足だけで、民家並みの大きさがある。

腹にあたる部分は三つの穴が開いてあり、

顔は笛と同じく三つ目になつてて、角がある。

なんだコイツ

「貴様等の魂をなす」

怪物の魔術

ナツ、グレイ、ルーシイ、ハッピー、マカロフ、俺が同時に叫んだ。

「な……何だ！？ こんなのは知らないぞーー！」

カゲヤマが驚いている。

「あらら… 大変」

「……アゼレフ書の魔魔だ……」

ゼレフだと？？

「腹が減つてたまらん。貴様等の魂を喰わしてもううそ」

「なに……」

ナツが声を上げる。

「魂つて食えるのか……？」

「知るか……！」

グレイが突つ込む。

「お前ら、そんな状況じゃねえぞ……」

ナツヒグレイに囁く。

「一体……どうなってるの？ 何で笛から怪物が……」

ルーシイが囁く。

「あの怪物が呪歌^{ラバ}そのものなのさ。つまり、生きた魔法。それがゼレフの魔法だ」

ゴールドマインが囁く。

「生きた魔法……」

「ゼレフ？ — ゼレフって、あの大陸の一？」

「『黒魔導士ゼレフ』、魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士だ」

「何百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を現すなんてねえ」

エルザ、グレイ、俺、ボブの順で言った。

「さあて……どこのどの魂から頂こつかな……」

ララバイが見下ろしながら言った。

「決めたぞ……全員まとめてだ」

すううううう

何かを吸っている。

「いかん……ララバイ呪歌じや……」

マカロフが叫ぶ。

やまつ……

「ハッピールーシイ！マスター達とカゲヤマを頼む……！」

俺は叫んだ。

「あいぞーーー！」

「ナツ！グレイ！エルザ！行くぞーーー！」

「燃えてきたああああ！ーーー！」

「任せとけー！」

「ああ！」

四人同時に走り出す。

「換装・天輪の鎧！－！」

スバアアアア－！」

ララバイの足を、エルザが斬る。

「おりやああああ」

ナツがララバイの足を昇り、顔面に蹴りを食らわせる。

「アイスマイク……」

グレイが両手を伸ばし、重ねる。

「ランス 槍騎兵！－！」

氷の槍が、ララバイの体を破壊する。

「がああつつ」

ララバイが唸る。

「鳴り響くは招雷の轟。天より落ちて灰燼と化せ！」

俺が右手を真上に伸ばし、紫電を上空に放送出する。

ララバイの頭上に魔方陣が現れる。

「レイジングボルトオオーー！」

魔方陣に紫電が落ちる。

「があああ！！！」

「次で決めるぞーー！」

卷之二

一換装・黒羽の鎧――――

「アイスメイク・大槌兵！」 （ハジマ）

火竜の鉄拳！！

紫電方天戟！！

「バカな！」

激しい轟音と共に、ララバイが崩れ落ちる。

定例会会場を壊して。

「見事！！」

「ゼレフ書の悪魔をいつもあつたといふ」

「これが……妖精の尻尾の魔導士……！」

マカロフ、他ギルドのマスター、カゲヤマの順で言った。

「ふう～

流石に、魔力を使いすぎたか……

あ…刀、拾いに行かないと……

「どうじゅー……す、こじやうおー……！」

マカロフが何か、自嘲している。

「ま、経緯はよく分からんが、フュアリー・テイルには借りができる
まったくなあ」

「ふむ

「しかし、これは……」

マスター達が、定例会の会場があつた場所を見ている。

「あ……」

「ははっ……見事にぶつこわれちまつたなア」

マスター達が叫ぶ。

「おはよう」

「逃げるぞ！お前ら！」

「マスター申し訳ありません…」

俺、グレイ、エルザの順で言った。

「お、捕まえられたるー。」

お前に捕まん候たー！！！」

その後、多額の請求書がギルドへ届いたのは言つまでもない。

ラクサス登場（前書き）

名前：ミハエル・ベンフォード

年齢：19歳

性別：男

好きなもの：カレー

嫌いなもの：猫

評議院 機密情報 調査室勤務。バロンに家族を殺されており、その為かバロンの情報をスピアに流す。時たま、メガネをかける。

ラクサス登場

クローバーの町から帰還して、一日。

俺は自宅で寝ていた。てか、起きた。

ボサボサの髪を整えながら、壁に立てかけてある刀に声をかける。

「アオイ、起きろよ」

顔を洗つて飯を食い、歯を磨く。

ルーナセラフィの服を着て、刀を背負う。

それから、ギルドに向かつ。

「おはようござこまわ」

マカロフに声をかけたが、反応がない。

「うへんうへん」

「あら、おはようスピア」

後ろから声がした。振り向くと、ミラだつた。

「ミラか。おはよう」

「マスターはこの前の、定例会会場の修理費用の金額が高すぎて払

えないつて悩んでるの

「あーりー…… ちなみに、いくらぐらーい？」

ちょっと聞くのが怖い。

「一千万」よ

S級クエスト約五つ分だな。

「あ、スピア。評議員のミハエルって人が、話があるって

ミラが、思い出したよついに言ひ。

「話？」

「マグノリア駅で十時について、連絡があつたの」

「解った」

二時間後 マグノリア駅

駅の前で、待つていると肩を叩かれた。

黒い髪に白いTシャツの男だった。

「お久しぶりです」

ミハエルが話しかけてきた。

「ミハエルさん、話つてのはは？」

ミハエルは辺りを見渡して言った。

「……いや話しこくいんで」

それから、俺とミハエルは駅近くの自宅へ向かった。

「やつにえば、^{アイゼンヴァルト}鉄の森の連中はどうなりました？」

自宅で、ミハエルは椅子に座り、俺は飲み物を準備していた。

ミハエルは五年前、軍隊を離隊し、評議院に入院した。

現在は機密情報調査室に所属している。

「現在、裁判中です……まあ……おそらく全員、実刑でしじつね……カゲヤマは怪我が治り次第、裁判です。エリゴールは……」

「逃亡中ですか？」

「はい。おやうぐ、^{オラシオンセイス}六魔将軍に匿われているのではないかと……」

ミハエルは、スピアの用意した飲み物を飲んで続けた。

「スピアードさん……今回の事件、やはりバロンが絡んでました……」

「マジか……」

「呪歌の入手経路について、カゲヤマに事情聴取をしていると判明しました」

「カゲヤマは解除魔導士だつたと思つたですが？」

「呪歌は、評議院管理^{ララバイ}下の施設で厳重に保管されています。並大抵の魔導士^{ジヤ}解除できません」

ミハエルはさりに続けた。

「カゲヤマとその他のメンバーの供述をまとめると、事件の数日前呪歌や定例会の情報を黒い紳士服の男が提供してたらしいんです」

「そうですか……」

俺は、本棚の上に丸めて置いてある、古びた地図を広げた。

「呪歌^{ララバイ}の保管施設は？」

「……」

ミハエルが指した位置に、ペンで丸印をつける。

そして、矢印を引つ張つて『バルーン 呪歌を盗む』と書き込んだ。

「それから、新しい情報なんですが……」

「はい」

「三年前、フラー^ゴで大きな凍りの塊……おそらくトリオラだと思

われる物を運んでいる集団を見たと言つ情報の中に、バロンの特徴と一致する人物がいました。その集団は、そのままガルナ島に行つたそうです

「ガルナ島。確かに、悪魔の島だつたな……」

地図に書き込む。

「それにしても、こんなに情報を流して良いんですか？」

「まあ、犯罪行為ですよね……でも、バロンを……黒い天使達を壊滅させる事ができるなら、俺は捕まつても良いんです」

六年前、初めて会つた時は知らなかつたが

ミハエルは家族をバロンによつて殺されている。

「じゃあ、そろそろ失礼します……仕事抜け出してきたんで」

ミハエルを送りだした後、地図を持って、再びギルドへ行く。

フェアリー・テイル ギルド内

扉を開けて、中に入る。

カウンターでコップ拭いているミリヤー声をかけた。

「ミリヤー、酒を一杯」

マスターはまだ唸つてゐる。

酒の入った、コップを持って、一階へ上がる。

あ、俺一応三年前から三級魔導士です。

丸テーブルにコップを置き、地図を広げる。

改めて、バロンの行動パターンを探りつつするが分からない。

大陸の北で事件を起こしたかと思えば、南で事件を起しきる。

一体何がしたいんだ？

「よお、スピア」

声をかけてきたのは、金色で短髪の男。

耳にはヘッドフォンを付けている。

「なんだ……ラクサスか……脅かすなよ」

「んなつもっはねえよ。お前、まだそれやつたのか」

「悪いがよ」

「こや……」

そつまつとラクサスは地図の一 部分を指でさした。

「……でも、奴の目撃情報があった……」

「お前……」

「勘違いするなよ。こんな所で、辛氣臭せえ顔されちやあ酒がまずくなるんだよ……」

ラクサスの示した場所に丸印を付ける。

下では、ハッピーが「終～～～～」って叫んでる。
ん?

「なあ、ラクサス……眠くなえか?」

「ああ……ミストガンだな……」

ミストガンはどういう訳か、誰にも姿を見せたくないらしく、仕事をとる時はいつも全員を眠らせる魔法を使う奴だ。

階段を降りて、ミストガンの元へ駆け寄る。

「久しぶりだな、ジエラール」

「……その名で呼ばないでくれ」

俺がミストガンと初めて出会ったのは、七年前。

バロンへの復讐の為に、旅をしていた頃

とある出来事で、彼と出会った。彼も旅をしていったようで、その時は小さな女の子と一緒にいた。

その女の子がミストガンをジェラールと呼んでいた。

俺が、フェアリーテイル妖精の尻尾ヒツヅメに入つて、再開した時には既に顔を隠し

ミストガンと名乗つていたが、声で解つた。

ラクサスは、ミストガンをアナザージェラールと呼んでいた。意味は知らない。

「……スピア」

ミストガンが紙の束を渡してきた。

「……あの男の情報だ…使つてくれ」

「……ありがと」

正直、涙がでそうだ。二年前、ラクサスやミストガンはもつと前だが、全ての過去をギルドのメンバーに打ち明けた後、

マカロフをはじめ、ギルドのメンバーがバロンについての情報を集めてきてくれるようになった。

そのおかげで、地図はほとんど真っ黒だ。

ジェラール…ミストガンは、依頼板の依頼書をとり、マカロフに渡した。

リクエストボード

「行ってくる

「これっ……眠りの魔法を解かんか！！」

ミストガンが出ていった後、ギルドのメンバーは目を覚ました。

グレイが、ルーシィにミストガンの説明をしていく。

「オレは知つてつだ

ラクサスが一階から声を上げる。

「ラクサス！」

「いたのか！」

「珍しいな！..」

いや、ラクサスは基本的に一階にいるけどね。

「ラクサスー！..オレと勝負しろー！..」

ナツ、俺に勝てなきや、ラクサスには勝てねえよ。

「やうやう。エルザに勝てねえよじゅ、スピアにすり勝てねえよ

「じつこつ意味だ」

エルザ、怖いよ…

「オレが最強つてことだ」

「降りてこ……の野郎……」

「おまえが上がつてこい

「上等だ……」

チツ

「レイジングボルト！」

ナツに紫電が落ちる。

「ナツ！一階には上がるな

「ははっ……怒られてやんの

「ラクサスも落ち着け」

「妖精の尻尾最強の座は誰にも渡さねえよ。ヒルザにも、ミストガ
ンにも、
あのオヤジにもな」

ラクサスが俺を指さした。

「スピア、お前もだ。オレが……最強だ……」

「そう言つと、奥に引っ込んだ。

はあ～… つたぐ。

「皆、すまない。ラクサスも反抗期なんだ」

「まあ、スピアが言ひならいいけどよお」

「ねえ//ラさん。聞きたいんですけど」

「なあに~? どうしたのルーシィ」

「せつめ、スピアードさんがラクサスって人の代わりに誤つてたけど…」

「ああ。スピアはラクサスの弟子なのよ

「弟子?…」

「そつ。このギルドでラクサスと対等に戦えるのはマスターとスピアだけ」

「謙遜するなよ、//ラ」

後ろを振り向くとスピアがいた。

ルーシィと//ラが会話してたので参加してみた。

「ルーシィ、知ってるか? ミリは昔、魔人つて恐れられたんだぜ」

「えつー? 本当ですか?」

「昔の話よ。今は、スピアにはかなわないわ」

「いや、だから謙遜するなつて」

「あ、そうだ。さつき、スピアードさんが言つてた、一階に上がるなつてど」「うう意味ですか?」

「スピアでいいさ……一階には一階とは比べものにならないくらい難しい仕事が貼つてある」

「そう。 S級の依頼^{クエスト}」

「一瞬の判断ミスが死につながる危険な仕事だ。まあ、その分報酬もいいがな……あ、ミラ酒くれ」

「はいはい」

ミラが酒を注ぎ、ながら言つ

「S級の仕事は、マスターに認められた魔導士しか受けられないの。資格があるのは、エルザ、ラクサス、ミストガン、スピアを含めて六人しかいないのよ」

「へえ~」

「S級なんて、目指すもんじゃねえぞ。命がいくつあっても、足り

ない仕事ばかりだからな

「みたいだね」

この日の夜、ルーシィがS級クエストに行くなんて俺は想像していなかつた。

「ふわあ～～」

大きなあぐびをしながら、家を出る。

ギルドに向かつて歩いていく。

ギルドの扉を開けようとすると、中が騒がしい事に気付いた。

「なあ、何か騒がしくないか？」

「うん。こつもよつ、違つた騒ぎだよね」

扉を開けようとした瞬間……

バタンツツ

顔面に激しい衝撃が走った。

勢いよく、扉が開いた。

い…………痛テヒヒ…

中から出てきたのは、エルザだった。

「つ……エルザ、どうした？」

エルザの声をかける。

「…………何だスピアか。丁度良い……付いてこい」

エルザがキレてる……

「何があつたんだ?」

エルザが走つたので、俺も追いかけながら言った。

「ナツ、ルーシー、ハッピーが勝手にS級のクエストに行つた!
止めに行つたグレイも戻つてこない!!」

勝手に… S級だと…

「場所は?」

「悪魔の島……ガルナ島だ」

ガルナ島!! バロンの目撃情報があつたところだな。

「よし……あのバカ共を連れ戻そう……ガルナだとここから一日はかかるな」

二人は駅の前で止まつた。

「列車で、ハルジオンに行き、そこから、船でガルナ島へ行く」

エルザの指示に従い、列車に乗つた。

……眠い……

列車内

「勝手にS級なんて、昔のスピアみたいだな…」

エルザが言う。スピアは向かいの席で寝ているが、構わない。

それにアオイが応答してくれる。

「そうだね……あの時は確か、凶悪モンスター『ラクリマホーン』の退治だったよね。スピアの紫電も、刀も全然通用しなかったもんね」

「ああ。あの時は、私やラクサス、ミストガンも仕事でいなかつたな…」

「マスターが助けに来んだよね」

「そうなのか？それは初耳だ」

「マスターは『高みを田指すことは悪い。敵をじりうと、強くなるのも悪い。しかし、その為に命を落とすなど馬鹿げておる』って

「流石、マスターだな」

そんな話をしていると、ハルジオンに到着した。

「スピア！起きろー！」

「ん？ああ

田が覚めた俺は、直ぐにエルザを追つ。

「なあ、エルザ。どうやって海を渡るつもりだ？」

「……

「……考へてなかつたのかよ…エルザらしいな

そう言いながら、近くにいた船乗りに話しかけた。

「ガルナ島？勘弁してくれ、名前も聞きたくねえ」

他の船乗りたちも、皆行きたくないと行つた。

「エルザ、どうする？」

「仕方ない……手荒なマネはしたくなかったんだが

そういう、近くにいた海賊に声をかける。

「は？ガルナ島、行くわけねえ……嬢ちゃん、ケガするわ

手を振りながら、あっちに行けと行つている。

「やうか……

そつ言つとエルザは、剣を、おやじく船長であるうつ膝鼻男の首に、

切先をあてた。

「今すぐ、船をだせ」

おい、エルザ……怖い……

「おいおい、嬢ちゃん、威勢がいいねえ……」

海賊船の戦闘員がエルザを囲む。

「でも、この数相手にはできねえだろ」

確かに数が多い。

仕方ない……

右手を頭上に挙げる。

「レイジングボルト！」

グワァアアアと叫ぶ声と同時に、戦闘員が倒れる。

「余計な世話だつたか？」

「いや、助かつた……まあ、船長じいすゑんっ。」

「わっ……解つた。ガルナ島だろ……直ぐに船を出でや……乗つてくれ

こつして、海賊船に乗りガルナ島へ向かつた。

アレ…… 眠い……

目が覚めると、いつのまにか夜になっていた。

前方には、ガルナ島が見えはじめていた。

海岸で、大きな津波が起きてる。

あれって……

「エルザ！」

船の看板で腕を組んでいるエルザを呼んだ。

「アレ、ルーシィじゃないか？」

海岸を指さす。

すると、同時に大きな熊みたいな生物が

ルーシィに飛びかかっている。

「エル…… つてもういねえ！！」

海岸を見ると、既に熊みたいのは倒されている。

船が島に到着した。

「じゃ、ここで待機してくれ

「了解しました！！スピアーデさん！！」

海賊達の声をききながら、エルザ達の元へ向かう。

その瞬間、何かを感じた。

これは……

ルーシィとエルザもめでいる。

「あたしたち……なんとかこの島の人たちを救つてあげたいんだ」

「興味がないな」

「じゃ……じゃあせめて最後まで仕事を……」

ルーシィが言いかけたが、エルザが剣を突きつけ言った。

「仕事？違うぞルーシィ。貴様等はマスターを裏切った……ただですむと思つなよ」

「エルザ、落ち着けって……」

エルザの剣をつかみ、下げる。

「ルーシィ、島の人を救いたいと言うお前は立派だ。そして、仕事を最後までしたいと言つた……だがなここれは仕事じゃないぞ。受理

されてないしな……お前らは勝手な行動をしたんだ……自覚しない

ルーシィがビビッてる。

俺は、魔力を上げる。

「アイゼンヴァルト鉄の森の一件で、一端の魔導士にでもなつたつもりか？あの程度の依頼は、リクエストボード一階の依頼板に沢山ある。お前らはまだまだひょっ子なんだ……」

魔力を下げる。

「……エルザ、ナツとグレイを探していく」

「…解つた」

それから、近くの森に入る。

草の量も多く、虫が沢山いる。

森の奥深くまで入ったところで、足を止める。

「こりゃんどう？バロン」

少し大きな声で言つ。

「お気づきでしたか……十年ぶりですね」

目の前に一人の男が立っていた。

黒い紳士服の男。右手の手のひらには、

ハートマークの両端に天使の羽、そのマーク全体に大きくバツ印が

描かれている
ブラックエンジェルズ

黒い天使達のギルドマークがあった。

「いつから、私がこの島に居ると？」

「最初、この島に来た時だ。大きな魔力を感じた……いわゆる邪氣だな……

この島は、悪魔の島だ。最初は彼らかと思ったが、俺が魔力を上げた時同じように魔力が上がった。そして、その魔力はある時……お前がおやつさんと戦った時と同じだった……」

「なるほど、流石ですね」

いつの間にか、バロンは後ろにいた。

「つ……」

急いで離れて、距離をとる。

「……バロン。お前は何故この島に……デリオラを運んだのもお前だろ」

「ええ。三年前です、零帝と名乗る男が私を訪ねてきましてね……ある物を運んでもらいたいと」

「……」

刀を抜き、バロンに斬りかかる。

しかし、手前で何かに押さえつけられた。

地面につつ伏せで落し下する。そして、地面にクレーターができる。

「クッ……重力魔法か……」
グラビティン

「十年も経つのでね、少々強力になりました」

「…そのようだな…」

右手を突き出し、紫電を飛ばす。

しかし、それも当たらなかつた。

バロンの姿はもうなかつた。

「…紫電ですか。いつの間に、そんな魔法を?」

「こからか声がする。

「お前を殺す為に、習得したのさ…」

「フフフ……しかし、無駄のよつですね……その魔法は五分後に解けます」

声がだんだん聞こえなくなつてゆく。

「オイ!待て!まだ終わつてねえ!…」

「私は、この後も予定がありましてね……大丈夫ですよ、まだこの島にいますから……」

いつでも相手になつて差し上げます。では……また

バロンの声は完全に聞こえなくなつた。

「クソッ……」

重力魔法で起き上がる事は、出来ないが
多少、体は動く。

首にのネックレスを取り出し、強く握る。

「すいません……おやつさん……」

田の前に落ちている、刀の柄を握る。

「すまねえ……アオイ……」

「俺は……まだ弱え……」

土が涙と血で汚れていく。

昔の話（後書き）

バロン登場させたら、全然進まなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4769z/>

FAIRYTAIL～過去の記憶は未来の希望へ～

2012年1月5日17時53分発行